

# 『古事記』日の神としてのアマテラス

—ヤマトタケル物語を中心に—

権赫晟\*

(e-mail : kwonhs@scnu.ac.kr)

## <目次>

- |                          |       |
|--------------------------|-------|
| 1. 序論                    | 3. 結論 |
| 2. 本論                    |       |
| 2.1 ヤマトタケル「東征物語」の構造      |       |
| 2.2 ミヤズヒメとの結婚譚、前後の展開について |       |

キーワード：アマテラス(amaterasu), ヤマトタケル(yamatotakeru), ミヤズヒメ(miyazuhime), 太陽神(the sun god), 天神御子(son of the god)

## 1. 序論

『古事記』は「強烈な意図に貫かれた一つの作品」であると、吉井巖<sup>1)</sup>によって提示されたが、それは<天神→天神御子→天皇>という構造のもとに成り立つ。これは『古事記』が神の物語である上巻と、天皇の物語である中、下巻が分断されたものではなく、その物語の論理や構想が一貫しているというものである。

しかし、その一方で、天皇の王権の根幹に関わるアマテラスの位置づけが、上巻と中、下巻では異なるとする見方がある。それはアマテラス(天照大御神)の名義の問題である。アマテラスの名義については、従来通説では「天照は、天に坐々て照り賜ふ意」<sup>2)</sup>として、太陽神の意として解されてきた。しかし、名義上は太陽神を意味しないとする見方が、はやく原田敏明氏により出されている。原田氏は「天照大御神」の「天照」につい

\* 순천대학교, 조교수, 고전문학

1) 吉井巖(1992)「古事記の作品的性格(一)-天神から天皇へ-」『天皇の系譜と神話』三、塙書房、p.25.

2) 大野晋編(1968)『本居宣長全集』第九卷、筑摩書房、pp.307-308.

て、

この場合に天照というのは、他の例にも「あまてる」「くにてる」「しなてる」などとあるのや、また「たまひかる」などとも類をおなじゅうして、優れた姿をたたえる語である。もし天照が太陽であるとすれば、国照のごときは何を指すことになるのであるか。(略)天照大神という名の示すところは、むしろ大神という点にあり、大神の至高なる性格をたたえて天照とも称したのである。<sup>3)</sup>

としている。「アマテラス(天照)」は太陽神であることを標示するものではなく、名前の中心は「大神」にあるとするのである。この説を受けて、西宮一民氏は、『古事記』上巻のアマテラス(天照大御神)について、

「天照」はその「大御神」を修飾している。したがって、「天に照り輝くばかりに立派な」という称辞を冠する「大御神」なのである。(略)「天照大御神」は、「大御神」が核で、それだけで最高唯一の神であることを意味しているのである。<sup>4)</sup>

として、名義の「無核性」を主張した。これに対して、『古事記』の「天照大御神」は名義においても、実質的にも無核であるとする説が神野志隆光氏により出される。<sup>5)</sup>神野志氏は、アマテラスを、高天原の世界を貫くアメノミナカヌシ→アマテラスという理念の軸の中核とし、「日神としての原像に立脚するにしても、それを超えた新たな次元において、まさにオホミカミ(大御神)として、「日」の実質を捨象して「無核」的に純化した」神と捉えている。そして、

作品として『古事記』の達成という点で、のべたようなアメノミナカヌシ→アマテラスの軸の次元を見定めること、そしてそのアマテラスのさきに、「天神」より「天神之御子」を通して「天皇」へと展開する(吉井巖前掲論文)、『古事記』の構図をおさえることが大事であろう。

と述べている。しかし、神野志氏のいうように<アメノミナカヌシ→アマテラス>の軸の先に、

3) 原田敏明(1970)「原始信仰と日本古代宗教」『日本古代宗教』、中央公論社、p.74.

4) 西宮一民(1978)「古事記『天照大御神』考」『上代文学考究』、塙書房、p.120.

5) 神野志隆光(1983)『古事記の達成』、東京大学出版会、p.164.

吉井氏の〈天神→天神御子→天皇〉という、神の物語である上巻から、天神御子を経て中巻以降の天皇の物語という『古事記』の基本軸において、中、下巻を、上巻を受ける物語として読むとき、アマテラスを「日」の実質が捨象された神と捉えることに疑問が生じてくるのである。『古事記』でアマテラスは「日の神」として捉えることはできないのだろうか。

『古事記』中巻、神武天皇の巻、「東征」では、神武軍が河内から大和へ上陸しようとしたとき、五瀬命（神武天皇の兄）は敵である登美毘古の矢によって負傷し、次のように述べる。

故爾くして、詔ひしく、「吾は、日の神の御子と為て、日に向ひて戦ふこと、良くあらず。故、賤しき奴が痛手を負ひつ。今よりは、行き廻りて背に日を負ひて撃たむ」と、期りて、南の方より廻り幸しし時に、血沼海に到りて、其の御手の血を洗ひき。<sup>6)</sup>  
(そして、「私は、日の神の御子として、日に向かって戦うことは、よくない。だから、卑しい奴等から手傷を負ってしまった。今からは、迂回して背に日を受けて敵を撃とう」と、誓って南の方から迂回していらっしゃった時に、血沼海に着いて、その御手を洗った。)

日向から日下に至った神武軍は登美毘古と戦うが、カムヤマトイハレビコ（神武天皇）の同母兄五瀬命は敵の矢に当たって痛手を負う。五瀬命は、負傷したのは「日神之御子」でありながら日に向かって戦ったからだと言い、日を背負って戦おうと南方へ進路を変更する。ここでアマテラスは『古事記』で唯一「日神」と記される。これについては、西郷信綱氏が「それは下に『日に向かひて・・・』『日を負ひて・・・』とあるのに引かれたせいに違いない」<sup>7)</sup>としている解釈が妥当であると思われる。ここでは、アマテラスの「日神」の側面を取り上げて、話を展開させているのである。

五瀬命はアマテラスを「日神」と呼び、自身を「日神之御子」と呼んでいるのだが、これは中、下巻において捨象されたとするアマテラスの「日」の実質が復活しているのである。この中巻の「日神」について、神野志氏は、本居宣長『古事記伝』の

天照大御神を日神とは此に始て見ゆ、抑上巻には、天照大御神とのみあるを、此に至て

6) 『古事記』(pp.143-144、以下『古事記』『日本書紀』の引用は、小学館、新編日本古典文学全集による。)

7) 西郷信綱(2005)『古事記注釈』第五巻、筑摩書房、pp.42-43.

更て如此ある故は、神代にては即此神の御上のことを語る故に大御名を申し、此は高天原に坐す御体を、此国土に在て仰瞻奉る処に就て詔ふ御言なるが故に、如此あるなり

という説を引いて、「それは、「神代」とは異なる論理において見るべきなのであろう。」としている。しかし、アマテラスが「日神」と呼ばれる時点では、神武天皇はまだ「天神御子」と呼ばれないし「天皇」（初代天皇）にも即位していない。神武天皇が「天神御子」と呼ばれるようになるのは、この直後、「日神」と称されたアマテラスの神助を得てからである。「無核」とされたアマテラスの先にく天神→天神御子→天皇の構図を抑えるべきとしながら、この基本軸に関わるところで、アマテラスの「日」の実質が復活してしまっているのである。また、アマテラスを「無核」として捉えることは、天皇の王権を保証することにおいて意味があると思うのだが、まだ初代天皇も誕生していない、天皇の治めるべき国の平定の過程で、アマテラスの「日」の性質が復活してしまっている。「日」の実質を捨象して「無核」的に純化した神と位置付ける意味がないといわねばなるまい。はたして、上巻のアマテラスと中、下巻のアマテラスは、位置付けが異なっているのだろうか。

『古事記』中、下巻では、「高光る日の御子」ということばが見られる。「日の御子」とは「天皇、皇子などに対する尊称。日の神の末裔の意」（『時代別国語大辞典、上代編』、三省堂、1989年）である。『古事記』で「高光る日の御子」とされるのは、倭建命（景行記）、仁徳天皇（応神記、仁徳記）、雄略天皇（雄略記）である（五例）。

「日の御子」は、他に『万葉集』で十二例（十一首）見られるが、『日本書紀』では見られない。『古事記』の「日の御子」について研究は、おおよそ皇統賛美の表現として捉えるに止まっており、『古事記』における特別な意味を見出そうとする論はほとんどない。「日の御子」の意味を『古事記』の作品の構造のうちに捉えようとする青木周平氏の論では、中巻最後の応神記、下巻始めの仁徳記に「日の御子」とされる仁徳天皇に注目し、仁徳天皇において天皇像が「天神御子」（中巻）から「高光る日の御子」（下巻）へと転換されたのであるとしている。<sup>8)</sup>しかし、中巻では天皇になれなかった倭建命も「高光る日の御子」とされているのであって、中巻の天皇像を「天神御子」、下巻の天皇像を「高光る日の御子」と単純に分けて考えることはできないだろう。

8) 青木周平(1994)「仁徳天皇論-日の御子像の成立-」『古事記研究大系6古事記の天皇』、高科書店、pp.77-80.

この論文では『古事記』中巻、ヤマトタケル物語を分析し、物語でのアマテラスは一貫した性質を保っていることについて論じてみることにする。

## 2. 本論

### 2.1. ヤマトタケル「東征物語」の構造

景行記の「日の御子」の例について考察してみよう。景行記での「日の御子」は倭建命を表すが、彼は第十二代景行天皇の皇子であり、三人いる太子のうちの一人である。

『日本書紀』のヤマトタケルが、景行天皇に寵愛され、徳を体現する理想的な忠臣として西征、東征に赴くのに対し、『古事記』のヤマトタケル（倭建命）は悲劇の英雄として語られており、「建荒之情」（猛々しく荒い心）を持つため父景行天皇に恐れられて、西征、東征というかたちで都から追放される。しかし、父からそのような処遇を受けつつも、彼は、西の「不伏無礼人等」（服従せず、秩序に背く人達）である熊曾建と出雲建を討伐し、東方の「荒夫琉神及麻都桜波人等」（荒れすさぶ神と服従しない人達）を平定して、任務を全うする。だが、途中病にかかり、故郷にたどり着けないまま死に至る。そして、その魂は白鳥となり、天に向かって飛んでいくのである。ここでは、ヤマトタケルの物語における「日の御子」という言葉が『古事記』という一つの作品の中でどのような意味をもっているのかを、『日本書紀』と比較しながら考察することにする。

まずは、「日の御子」が景行記のどのような場面で表われているのかを構造の面から捉えることにする。『古事記』の景行記と『日本書紀』の景行紀の内容を見てみると、後者が「景行天皇の西征、九州巡幸」、「ヤマトタケルの西征、東征」、「景行天皇の東国巡幸」と、ヤマトタケルの物語の前後に景行天皇の物語を配置しているのに対し、前者は「ヤマトタケルの西征、東征」を中心とする物語のみで構成されている。ヤマトタケルの物語は『古事記』『日本書紀』ともに前半の西征の物語と後半の東征の物語の二つに分けることができる。このうち『古事記』の東征の物語に「日の御子」の歌謡があらわれる。『古事記』の東征の物語のモチーフを挙げると次の通りである。

- 1) 天皇から東征の命令を受ける。
- 2) 伊勢神宮を参拝。ヤマトヒメから草薙剣と囊を授かる。

- 3) 尾張国でミヤズヒメと結婚を約束する。
- 4) 相武国で国造の火攻めに遭い、草薙剣と囊で難を逃れる。
- 5) 走水海で渡神の難に遭い、オトタチバナヒメが入水して神を鎮める。
- 6) 蝦夷を平定する。
- 7) 足柄板で坂神を殺害。オトタチバナヒメの死を悲しんで嘆く（東国命名）。
- 8) 甲斐の酒折宮で筑波問答。東国造を任命する。
- 9) 尾張国でミヤズヒメと結婚。草薙剣を置いて行く。
- 10) 伊吹山の山神に惑わされる。居寤清水で正気に戻る。
- 11) 病にかかり。道中苦難の歩行をする。
- 12) 能煩野で故郷を思う歌を詠む。死去。
- 13) ヤマトタケルは白鳥となって飛び、妻子は嘆きつつ追う。最後に白鳥は天へと飛翔。

『日本書紀』には3)がなく、(1)(2)(4)～(6)(8)(7)(9)～(13)の順で語られる(4)は駿河国、(7)は大碓峠)。

ヤマトタケルの物語で「日の御子」の歌は、(9)のヤマトタケルと尾張国のミヤズヒメの結婚譚に見られる。(9)の結婚譚が『古事記』の東征の物語においてどのような位置にあるのか把握するために、東征の物語の構造をみていくことにする。

東征の物語は、景行天皇がヤマトタケルに東征の詔を出すところから始まる(1)。

爾くして、天皇、亦、頻りに倭建命に詔はく、「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人等とを言向け和し平げよ。」とのりたまひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣しし時に、ひひら木の八尋矛を給ひき。<sup>9)</sup>

(そして、天皇は、また重ねて倭建命に仰せられて、「東の方にある十二の国の荒れすさぶ神と、服従しない者たちとを、言向けて平定せよ」とおっしゃって、吉備臣らの祖先、名は御鉏友耳建日子を従わせて遣わした時に、柁の木でできた大きな矛をお与えになった。)

『古事記』では、ヤマトタケルが西征から帰還して休む間もなく、ヤマトタケルの「建荒之情」（猛々しく荒い心）を恐れる景行天皇が、「東の方にある十二の国の荒れすさぶ神と、服従しない者たちとを、言向けて平定せよ」とヤマトタケルに東征の詔を出してい

9) 『古事記』、p.223.

る。この詔に対応する言葉が、出発時にミヤズヒメの家に寄った記事(3)の直後に見られる。

故、尾張国に到りて、尾張国造が祖・美夜受比売の家に入り坐しき。乃ち婚はむと思へども、亦、還り上らむ時に、婚はむと思ひて、期り定めて、東の国に幸して、悉く山河の荒ぶる神と伏はぬ人等と言向け和し平げき。<sup>10)</sup>

(さて、尾張国に着いて、尾張国造の祖先、美夜受比売の家に入っただけで、その時に姫と結婚しようと思ったけれど、再び帰り上ってきた時に結婚しようと思って、しっかり約束をして、東方の国にお出かけになって、山河の荒れすさぶ神と服従しない者たちをすべて言向け平定していった。)

傍線部をみると、ヤマトタケルは「東方の国にお出かけになって、山河の荒れすさぶ神と服従しない者たちをすべて言向け平定していった。」とある。これは、これから始まる東征の物語を概括的に述べたもので、この尾張国のミヤズヒメの家が東征の出発点であり、帰着点であることをあらわしている。実際、ヤマトタケルは、(3)でミヤズヒメと帰還した際に結婚する約束をし、東征を終えた後、(9)で結婚するというように、東征の前後にミヤズヒメの家へ寄っている。これから始まる東征の物語で、ヤマトタケルは「東方十二道」を征討し、その地を「東国」と定めて平定するのである。

一方、『日本書紀』の東征の詔は、景行四十年六月に「東夷多叛、邊境騒動」(東方の辺境の国が多く背いて反乱した) ことにより出されている。

天皇詔群卿曰「今東国不安、暴神多起、亦蝦夷悉叛、屢略人民。遣誰人以平其乱。」<sup>11)</sup>

(天皇は群卿に詔して、「今、東国は平穩ではなく、荒ぶる神が多く騒いでいる。また、蝦夷はことごとく謀反を起こして、しばしば人民を略奪している。誰を派遣してその反乱を平定したらよからうか」と仰せられた。)

下線部は、「今、東国は平穩ではなく、荒ぶる神が多く騒いでいる。また、蝦夷はことごとく謀反を起こして、しばしば人民を略奪している。」とある。『日本書紀』では『古事

10) 『古事記』、pp.224-225.

11) 『日本書紀1』、p.369.

記』と異なり、征討の対象を「東国」「東夷」と記している。この東征の記事以前にも、景行二十七年の記事や神代紀、崇神紀に「東国」の語が見え、『古事記』のように、ヤマトタケルの東征によって「東国」が定められるという構想ははっきりと示されていない。また『日本書紀』の物語には、東征前にミヤズヒメの記事や、東征の物語を総括的に述べるような記述はなく、ミヤズヒメの家を東征の基点とする物語の構造になっていない。

『古事記』では、ミヤズヒメの家が東征の基点となるように、かなり意識的に構想されているといえるだろう。

## 2.2. ミヤズヒメとの結婚譚、前後の展開について

次に、ヤマトタケルがミヤズヒメの家に帰ってくるまでの、(4)～(8)お東国平定の過程を見てみよう。『古事記』では、相武国の野火攻めで国造を滅ぼす話(4)、逃水海でオトタチバナヒメが入水する話(5)が語られた後、ヤマトタケルが蝦夷を征討したことが次のように簡潔に述べられている(6)。

其より入り幸し、悉く荒ぶる蝦夷等を言向け、亦、山河の荒ぶる神等を平らげ和して……12)

(そこからさらに入っていっちゃって、ことごとく荒れすさぶ蝦夷たちを言向け、また、山河の荒れすさぶ神たちを平定して……)

これは先に挙げた天皇の東征の詔や東国平定を概括的に述べた部分の記述と表記がほぼ同じである。ただし、ここでは服従させる対象が「蝦夷」と限定されている。この記事の後、ヤマトタケルは帰還する。その道中では、ヤマトタケルは足柄板で坂の神を打ち殺し、オトタチバナヒメを思って「あづまはや」（ああ妻よ）と嘆く。そして、これをもって征討した地を「阿豆麻（アヅマ）」と命名している(7)。

故、其の坂に登り立ちて、三たび歎きて、詔ひて云ひしく、「あづまはや」といひき。故、其の国を号けて阿豆麻と謂ふ。13)

(そしてその坂の上に登り立って、三度ため息をついておっしゃって言うには、「私の妻よ、ああ」と言った。それで、その国を名付けて阿豆麻という。)

12) 『古事記』、pp.226-227.

13) 『古事記』、pp.228-229.

さらに甲斐の酒折宮で、ヤマトタケルが「新治筑波を過ぎて幾夜が寝つる」(新治、筑波を過ぎて幾夜寝たのか)と歌った時、「日々並べて 夜には九夜 日には十日を」(日数を重ねて、夜には九夜、昼には十日でございますよ)と返した火焚の老人を誉めて東国造に任命している(8)。

こうして、ヤマトタケルはミヤズヒメの所へ帰っている(9)。このように見ていくと、ミヤズヒメの許から出発して再び帰る道程は、征討した地を東国と定め、東国造を任命するというように、反乱していた地を国家の制度の中に組み入れる過程といえる。

これに対して、『日本書紀』の東征は、(5)までは大体『古事記』と同じ内容の話であるが、(6)以降から異なっている。『日本書紀』の東征の中心は蝦夷の征伐(6)である。『古事記』ではたった一文で済まされていた蝦夷征討であるが、『日本書紀』では平定の経緯が詳しく記されている。

爰日本武尊、則從上総転、入陸奥国。時、大鏡懸於王船、從海路廻於葦浦、横渡玉浦、至蝦夷境。蝦夷賊首嶋津神・国津神等、屯於竹水門而欲距、然遥視王船、予怖其威勢而心裏知之不可勝、悉捨弓矢、望拜之曰「仰視君容、秀於人倫、若神之乎。欲知姓名。」王對之曰「吾是現人神之子也。」於是、蝦夷等悉慄、則褰裳披浪、自扶王船而着岸。仍面縛服罪、故免其罪、因以、俘其首帥而令從身也。蝦夷既平、自日高見国還之、西南歷常陸、至甲斐国、居于酒折宮。14)

(かくして日本武尊は、上総から転じて陸奥国に入られた。その時は、大きな鏡を御船に掛けて、海路より葦浦に廻り、玉浦を横目に過ぎて、蝦夷の住む境に到着された。蝦夷の賊首や嶋津神・国津神たちは、竹水門に群れ集まって防戦しようとした。しかし、遥かに御船を望んで、その威勢に恐れをなし、心中とても勝てそうにない悟って、ことごとく弓矢を捨てて、遠くから拝して、「君のお顔を仰ぎ見ますと、人に秀でておられます。もしや神ではございませんか。お名前を承りたいものです」と申しあげた。王は答えて、「私は、現人神の御子であるぞ」と言われた。そこで蝦夷どもは、ことごとく震えあがり、すぐさま着物の裾を持ち上げ披をかき分けて、自ら王の船を引いて岸に着けた。そのうえで、自ら捕らわれの身となって帰順した。そこで王は、その罪をお許しになった。そして、その首領を捕虜として、随従させられた。蝦夷を残らず平定して、日高見国より引き返して、西南方の常陸を経て、甲斐国に到り、酒折宮にご滞在になった。)

14) 『日本書紀1』、pp.376-377.

また、(7)と(8)の順番が逆であり、(8)のヤマトタケルと火焚役との問答歌は、「即美乗燭人之聰而敦賞。」と手厚く褒美をするだけで、国造に任命することはない。続く(7)でも、『古事記』と同様に、「あづまはや」と嘆いたので「故因号山東諸国、曰吾孀国也。」と「吾孀国（アヅマノクニ）」と名付けたとしているが<sup>15)</sup>、やはり国造を任命することはない。『日本書紀』で東国の国造を定めるのは景行天皇である。後に、景行天皇は寵愛していたヤマトタケルの死後、恋しさにその平定した地を巡幸し、豊城命の孫である彦狭島王を東国の都督に任命する。

(7)の話の後、『日本書紀』では、さらに信濃国を平定した話が詳しく語られて、(9)の尾張国のミヤズヒメの話に至る。『日本書紀』の東征は、賊軍の征討の様子を中心に語られるが、『古事記』では、征討よりもヤマトタケルが東方を天皇の統制下に組み込むことに関心があるといえる。

次に、(9)のミヤズヒメと結婚した後の展開を見てみよう。ここからヤマトタケルは破滅の道へと向かっていく。『古事記』では、伊吹山で山の神に惑わされ(10)、病にかかったヤマトタケルは当芸野から尾津、能煩野へと苦渋しながら歩む(11)。能煩野に着くと、国や家族を偲んで歌を詠むものの、病が急変し死去する(12)。その後、ヤマトタケルの魂は白鳥となり、伊勢・河内へ飛んだ後、天に翔け飛んでいく(13)。

『日本書紀』の場合もほぼ同じであるが、(12)では、ヤマトタケルは国を思って歌を詠むことはなく、伊勢神宮に捕虜の蝦夷を献上し、天皇に遣いを送って、東国平定を奏上して死去する。(13)では、ヤマトタケルの妻子が大和からやってきて嘆き哀しんで陵を造るのではなく、天皇が嘆き哀しんで、群卿百官に命じて陵を造らせている。『古事記』のヤマトタケルが父天皇から避けられた悲劇の英雄であるのに対し、『日本書紀』のヤマトタケルは父天皇から寵愛された理想的忠臣であることの違いがよくあらわれている。

以上、『古事記』のヤマトタケルの東征の物語の構成をみてみた。ヤマトタケルの東征は、ミヤズヒメの家を基点として語られていた。そして、ミヤズヒメの家から東征に出発して帰還する道程は、東方の地を天皇の国家体制組み込むというものであった。また、東征から帰還したヤマトタケルは、ミヤズヒメの許を去った後、征討に失敗し、病気にかかって死に至ったのだった。このように見ていくと、ヤマトタケルとミヤズヒメの結婚譚は、東征を達成

15) ただし、『古事記』では、足柄坂（神奈川県）より東の平定した国（東海道から東）を東国としているが、『日本書紀』では、碓日坂（群馬県）の東の諸国（東山道から東）を東国としており、両書で東国を指す地域が異なる。

したいわば絶頂の時期と凋落して死に至る破滅の時期との境目に位置しているといえる。この絶頂期で、ヤマトタケルはミヤズヒメによって饗応され、歌で「日の御子」と歌われるのである。次はその歌である。

美夜受比売、御歌に答へて曰はく、

高光る 日の御子 やすみし 我が大君 あらたまの 年が来経れば

あらたまの 月は来経行く うべな うべな うべな 君待ち難に

我が着せる 襲衣の襦に 月立たなむよ<sup>16)</sup>

(空高く光る日の神の御子よ、国の隅々などで領有されるわが大君よ、<あらたまの>年がきて去ってゆけば、<あらたまの>月はきて去っていきます。まことにまことにまことに、あなたを待ちかねて、私の着る襲衣の裾に月が立たないことがありますか)

ミヤズヒメは「(高く光る)日の御子よ、我が大君よ。年が過ぎ行けば、月も来て過ぎ行きます。まことにまことにまことに、あなたを待ちかねて、私の着ている襲の裾に月が立たないことはありませんか。」と答えている。ここでは、倭建命を「高く光る～我が大君」と称えつつ、「月立たなむよ」に「長い間あなたが来ないので月が経つのは当然です」という意味と、「あなたを待ちかねて生理になったのは当然です」という意味をかけている。長く待ち焦がれていた思いと生理になったことへの弁解が詠み込まれているのである。

この歌は、特に月の障りは不浄なものとされていることから、なぜここに月の障りを詠み込んだ歌が置かれているのかということが問題とされ、数多く考察されている。物語の文脈の中で捉えたものでは、益田勝実氏が、この結婚譚はヤマトタケルが伊吹山で敗北し破局していく話の直前に置かれていることから、「不浄のタブーを犯して、ふたりが契り合ったことが、伊吹山の神に敗北する伏線として巧妙に配置されている」<sup>17)</sup>としている。

「日の御子」という言葉をヤマトタケルの物語全体に関わらせて論じたものとしては、砂入恒夫氏の見解がある。砂入氏は、ヤマトタケルの東征の物語に上巻の「葦原中国の平定」で用いられる「コトムケ」「荒ぶる神」といった語句が見られることから、「ヤマトタケルの東征伝説は(略)神代に直結した神世と人世の接融、または交差するゾーンを舞台に展開された物語であることが考えられる。」とし、さらに、アマテラスの靈威譚と考えられることから、「東征のヤマトタケルは高光る日の御子として、天孫降臨のアメニギシクニニギシアマツヒコホノニギ命と神話的世界の中で相對峙した存在なのではあるまいか」としている。<sup>18)</sup>

16) 『古事記』、pp230-231.

17) 益田勝実(1972)『記紀歌謡』、筑摩書店、p.37.

ヤマトタケルがニニギと神話世界で対峙した存在としていることについては、いささか疑問であるが、地上世界の平定の完成という面からして、それ以外ではおおよそ認められてよいであろう。

「日の御子」の歌は、こうした神代から続く天下平定が完了した倭建命の絶頂期において詠まれている。ミヤズヒメは「高光る 日の御子 やすみし 我が大君」と倭建命を称えている。「高光る日の御子」と「やすみし我が大君」が連なって用いられている例は、『古事記』ではこれ以外ない。この「やすみし」とは、「我が大君」の枕詞で、「八隅を知ろしめす」という意味である<sup>19)</sup>。つまり、倭建命が「高光る日の御子」として天下を隅々まで平定した存在であることを、言おうとしているのである。「高光る日の御子」とはまさしく、ヤマトタケルをアマテラスとの血縁関係をもって称えたものである。この言葉からして、アマテラスを「無核」と捉えるのは無理があるとはいえない。

以上、倭建の物語にみられる「日の御子」について考察してきた。「日の御子」が歌われる倭建命とミヤズヒメの結婚譚は、倭建命が征討を達成した時点で語られているが、それは、アマテラスが「天神御子」に葦原中国の統治権を委任した時から続く、天下平定の事業が達成された時でもあった。<sup>20)</sup>倭建命が「高光る日の御子」と称えられるのは、そうしたことを象徴的にあらわしていると言えるであろう。

ヤマトタケルの征討には間接的にアマテラスが関与している。『古事記』のヤマトタケルは、アマテラスの御魂を祭る伊勢神宮の齋宮倭比売命を通して、アマテラスの神威を受け、西征・東征を果たしていた。このように、『古事記』のヤマトタケルの平定の物語にはアマテラスが深く関わっている。そのことと「日の御子」の歌はどのような関係があるのだろうか。

東征におけるアマテラスの関わりを確認してみよう。ヤマトタケルは、東征へと向かう際に伊勢神宮に参拝し、ヤマトヒメから「草薙剣・御囊」を授かる(2)。その後、ヤマトタケルは「草薙剣・御囊」を使って困難を乗り越えつつ、東国を平定して、ミヤズヒメの許に至る(9)。ヤマトタケルは草薙剣を結婚したミヤズヒメの許に置いて、素手で伊吹山の神を取りに出かける。そして、伊吹山の神の毒気にあたって病気になるなど、この直後から破局への道を歩むこととなる。草薙剣はいわばアマテラスの神威の象徴のようなもので、伊吹山で病気になったのは、この剣を手放したためにアマテラスの神威を得られなくなったからと考えられるのである。

18) 砂入恒夫(1983)『ヤマトタケル伝説の研究』、近代文芸社、p.143.

19) 『時代別国語大辞典 上代編』

20) 神野志隆光(1983)『古事記の達成』、東京大学出版会、p.201.

### 3. 結論

先に見た東征の物語の構造のことも考えれば、まさにヤマトタケルは東征達成の絶頂の時期と破滅の時期との境目で草薙剣を手放していると言える。ミヤズヒメの「日の御子」の歌は、アマテラスの神威を見に受けたヤマトタケルの絶頂期において詠まれている歌なのである。

結局はアマテラスの助けによって、草薙剣を持って平定は成されるわけであるが、「高く光る日(アマテラス)」の「御子」に「『日』の実質を捨象して『無核』的に純化した」神は捉えることはできないのではないか。このように『古事記』中巻、ヤマトタケル物語の分析を通じて、アマテラスの一貫した性質についての考察を行った。その結果、アマテラスには、太陽としての神の性質がそのまま表れていると捉えるしかないのである。

#### 【参考文献】

- 青木周平(1994)「仁徳天皇論-日の御子像の成立-」『古事記研究大系6古事記の天皇』、高科書店、pp.77-80.
- 大野晋編(1968)『本居宣長全集』第九卷、筑摩書房、pp.307-308.
- 神野志隆光(1983)『古事記の達成』、東京大学出版会、pp.164-201.
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注(1994-1998)『日本書紀』「新編日本古典文学全集」2~4、小学館、pp.369-377.
- 西郷信綱(2005)『古事記注釈』第五卷、筑摩書房、pp.42-43.
- 砂入恒夫(1983)『ヤマトタケル伝説の研究』、近代文芸社、p.143.
- 西宮一民(1978)「古事記『天照大御神』考」、『上代文学考究』、塙書房、p.120.
- 原田敏明(1970)「原始信仰と日本古代宗教」、『日本古代宗教』、中央公論社、p.74.
- 益田勝実(1972)『記紀歌謡』、筑摩書店、p.37.
- 山口佳紀・神野志隆光校注(1997)『古事記』「新編日本古典文学全集」1、小学館、pp.143-231.
- 吉井巖(1992)「古事記の作品的性格(一)-天神から天皇へ-」『天皇の系譜と神話』三、塙書房、pp.21-37.

논문 투고 일자 : 2020. 02. 28.
논문 심사 일자 : 2020. 04. 24.
게재 확정 일자 : 2020. 04. 24.

---

 <要旨>
 

---

 『古事記』日の神としてのアマテラス  
 -ヤマトタケル物語を中心に-

権赫晟

『古事記』は「強烈な意図に貫かれた一つの作品」であると、吉井巖によって提示されたが、それは<天神→天神御子→天皇>という構造のもとに成り立つ。これは『古事記』が神の物語である上巻と、天皇の物語である中、下巻が分断されたものではなく、その物語の理論や構想が一貫しているというものである。

そしてその構造において神野志隆光氏は『古事記』の天照大御神を、日の実質を捨象して『無核』的に純化した神と捉えている。しかし、神野志氏の言うように<アメノミナカヌシーアマテラス>の軸の先に、吉井氏の<天神→天神御子→天皇>という、神の物語である上巻から、天神御子を経て中巻以降の天皇の物語という『古事記』の基本軸において、中、下巻を、上巻を受ける物語として読むとき、アマテラスを「『日』の実質」が捨象された神と捉えることに疑問が生じてくるのである。そこで『古事記』中巻ヤマトタケル物語を分析し、アマテラスの性質について新たな考察を試みたい。

 Amateras as the sun god:  
 centering on the story of Yamato Takeru

Kwon, Hyuk-Sung

Iwao Yoshii has suggested that the *Kojiki* was "a piece of work that was carried through with a strong intention" but that it was based on the structure of Tenjin → Tenjin Imperial son → Emperors. This is because the *Kojiki* is not divided between the story of the gods and the story of the Emperor; both the theory and the concept of the story are consistent.

Based on this structure, Takamitsu Konoshi considers Amaterasu Omikami in the *Kojiki* to be a "nuclear-free" deity who abandons the substance of the day. However, as Konishi states, beyond the axis of the Amenominakanush → Amaterasu, when reading Yoshii's story of Tenjin → Tenjin Imperial son → Emperors from the first volume, the story of the gods, through the story of the Emperor in the middle, to the Emperors, reading the story of the middle and the bottom lines as the story of receiving the first volume, questions arise concerning the view of Amaterasu as a god who abandoned the "substance of the sun." I therefore intend to analyze the tale of Yamato Takeru in the middle volume of the *Kojiki* and take a fresh look at the nature of Amaterasu.